

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0583 ◆◆◆

20/05/13

【「大相場」への復権期待される5月相場】

すでに終了している4月相場は、月間を通した変動が3.01円にとどまり、3月に月間変動幅10.52円で2016年11月以来の「大相場」となった流れを引き継ぐことはできなかった。しかし、過去の経験則によると、5月相場は荒っぽい変動をたどることが少なくない。大相場が復権する可能性は果たしてあるのだろうか注目だ。

◎4月相場と逆方向の変動多い、「ドル高・円安」有利か!?

期待外れともいえる小動きに終わった4月相場だが、それを受けた足もと5月のドル/円相場はいったいどんな値動きをたどるのだろうか。恒例となっている過去の経験則を参考に、以下で考察してみたい。まずは1990年以降の星取表を調べてみると、30年間で15勝15敗。つまり、ドル高 or ドル安のいずれに振れるかはキッチリ五分五分だった。特徴とは言えないようだ。

しかし、いま少し突っ込んで調べてみると、5月相場は「年間を通して、かなり荒れ模様の展開を辿ることが少なくない」という傾向がうかがえる。とくに近年その傾向が強く、実際に幾つか例を上げると、2004年と2006年、2013年、そして昨2019年はいずれも年間3位の月間変動幅。また、2015年は同2位となっているほか、2010年は実に年間1位の変動を記録していた。

また、前述した「月間を通して荒れ模様」には、実はもうひとつの意味合いがある。具体的には、「変動幅」というデータに現れないところで大きく乱高下することも多い。こちら、2つほど例を挙げると、2017年は月間変動幅こそ4.14円で年間6位に留まったが、月初の111円レベルから月間高値114.37円まで上昇、そののち再び軟化して月末には110.20円台まで下落するという「行って来い」。なかなか激しい上下動をたどっているし、一昨年の2018年も似たような往来相場で、往復の価格変動はトータル7円近くにも達していた。今年のドル/円はここまで小動きにとどまっているが、月末にかけてまだまだ予断は許さないのかもしれない。乱高下にも一応要注意だ。

一方、それとは別に、ここ数年、具体的に言えば2015年以降、5年連続で「4月相場と逆方向に動く」という展開をたどっていることがチャートから確認できる。何故か、という理由付けを明確に指摘できないのだが、ともかく4月がドル高ならば5月はドル安、逆に4月がドル安に動いていれば5月はドル高に動く傾向がうかがえる。ちなみに、今年の4月は小幅ながら月足陰線。月間を通してドル安・円高方向に振れていることを勘案すると、ヒョクとして足もと5月相場は逆のドル高・円安への動きが有利であるのかもしれない。

最後に、過去の事象、ニュースなどを振り返った場合、5月は国際的な重要な出来事が多発しているが、そのなかでもとくに注目に値するのは北朝鮮情勢に関する要因だろうか。たとえば、2018年は「北朝鮮による、いわゆる『瀬取り』行為が公式に初めて確認される」、「トランプ米大統領が直前になり米朝首脳会談の破談通告(紆余曲折を経て、結局予定どおり6月12日に実施)」などが5月の出来事だったし、昨2019年は5月4日にその年初初めての飛翔体を発射。以降9月10日までの約4カ月間で10回、少なくとも20発以上の短距離弾道ミサイルが打ち上げられることになるキッカケとなっていた。

そうしたなか、今年についても考えてみれば、始まりは4月15日の金日成生誕記念日に姿を現さないなど4月だったが「金委員長が20日もの行方不明」になり、金融市場でも様々な憶測を呼んだことはまだ記憶に新しい。その後、一応映像ベースでも生存確認はされたものの、一部ではいまだに「映像加工説」や「影武者説」などが飛び交い、疑いの目を向ける向きも少なくないようだ。経験則的には、今年5月も北朝鮮情勢に関して引き続き注意する必要がある気もしないではない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

